

# アリストテレス：『形而上学』第7巻における実体論

——「普遍的に語られるものは実体ではない」ということについて——

池田 康男

(人文学部人文学科人間科学コース)

## Aristotle: On Substance in *Met. Z*

Yasuo IKEDA

(Department of Humanities, Faculty of Humanities and Economics)

### 目 次

序 .....	58頁
I プラトンのイデア論をアリストテレスはどうか捉えているか .....	59頁
II 『範疇論』における二つの述語形式 .....	62頁
III プラトンとアリストテレスの共通点 .....	63頁
IV 『形而上学』第7巻第13章で「普遍的なものは実体ではない」ということがどのように論じられているか .....	64頁
V 『形而上学』第7巻第3章における付帯的属性剥奪の意味するもの .....	67頁
VI 「形相は質料に述語される」ということについて .....	67頁
VII 形相の内在性について .....	69頁

## 序

『形而上学』第7巻を読むとき、相互間で矛盾を来す次の命題に出合う。

α. 「普遍的なものは実体ではない。」(1038<sup>b</sup>8-9, 1041<sup>a</sup>3-5)

β. 「形相は普遍的なものである。」(1036<sup>a</sup>28-9)

γ. 「形相は実体である。」(1032<sup>b</sup>1-2, 1033<sup>b</sup>17)

これらの命題から生じる矛盾を解くことができるのかどうか。すでに多くの研究者がこの問題に取り組んできた。Sykesのように、結局、矛盾は未解のままであるとする者がいる一方<sup>#1</sup>、WoodsおよびTelohのように、αにおける「普遍的なもの」の意味を限定することにより<sup>#2</sup>、あるいはLewisのように、αとγにおける「実体」の意味を限定することにより、矛盾を解こうとする者もいる<sup>#3</sup>。あるいは、LouxやDriscollのように、「形相は質料に述語される」というアリストテレスの主張に基づいて、*εἶδος*という同一語で表わされる種 (species) と形相 (form) とを分けることにより<sup>#4</sup>、あるいはLesharのように、他の仕方でも矛盾を解こうとする者もいる<sup>#5</sup>。

この人々の説には、それぞれ一長一短があるけれども、総合的に全体を見るならば、矛盾解決のための手立ては出尽していると考えられる。したがって、この論考は諸家の研究成果によりつつ、不備な点を補う。骨子は次のようになる。

相互との関連で矛盾が生じるα、β、γの主張のうち、問題があるのは、αの「普遍的なものは実体ではない」である。矛盾が解かれるか否かは、この主張における「普遍的なもの」をどのように解するかということにかかっている。ここで、「普遍的なもの」とは、個別の実体（例えばこの人やこの馬）を包摂する種や類、さらに上位の類を指す。命題の形式で言うと、例えば、「この人間は人間である」、「この馬は馬である」というように、個別の実体について述語される種および上位の類等々を指す。そのような種および類が、プラトンの説くイデアと重ね合せられて、αの主張になっているのである。

βの「形相は普遍的なものである」は真実である。しかし、形相は個別の実体を包摂する種ではなくて、質料を限定して個別の実体を成立せしめる原理原因である。種も形相も *εἶδος* と呼ばれる。したがって混乱が起こる。いずれも *εἶδος* と言われるとはいえ、種は分類上の概念であり、個、類、種差等との関連の中で捉えられる論理的な領域に由来する概念である。しかし、*εἶδος* が形相と訳されるべき仕方で用いられ、普遍的なものであり、実体であり、認識可能なものとして捉えられるときには、限定され規定されるべき質料との関係で常に捉えられている。前の場合には種は個別の実体に述語されるのに対して、「形相は質料に述語される」のである。

したがって、2種類の普遍的なものを考えなければならない。個別の実体に述語される種や類としての普遍と、無限定な質料に述語され、質料をこれ (*τὸδε τι*) として限定し、恒常不変であることによって認識を可能ならしめる形相としての普遍である。

では、なぜアリストテレスは「普遍的なものは実体ではない」と主張しなければならなかったのか。周知のように、不動の動者はアリストテレス哲学において、存在するもの一切の統轄者である。その統轄者は、質料と形相との、あるいは可能態と現実態との関連で捉えられた、存在するものの階層構造の終極で出合われるべきものである。ところが、もし、プラトンのイデアと重ね合わせて解された包摂的なものとしての種や類のごとき普遍者を実体とするならば、より普遍なものを求めて、最終的には、あらゆるものに述語される一や存在が究極的な実体であり、一切は一つのものになってしまうからである。アリストテレスはこのパルメニデス・プラトンのラインを決して認めることはできなかった。

原理原因として働く実体を、個別の実体、種、類という関連の中で捉えるのではなくて、個別の実体、質料、形相という関連の中で捉えるのでなければならない。なぜなら、実体の探究は前者の

関連の中では不動の動者へつながらないからだ。そのゆえは、前者の関連は、ピュシス(自然)の領域に根ざさないからである。それに対して、個体的実体の原理原因としての実体は後者の関連の中で捉えられるべきことを宣言している命題が「形相は質料に述語される」である。これは、個別の実体において、質料と形相は不可分な関係にあるばかりでなく、形相が個別の実体に内在していること、質料のあり方は形相の働きや目的によって自ずから定まってくることを意味している。

### I プラトンのイデア論をアリストテレスはどう捉えているか

『形而上学』第7巻第13章で「普遍的なものは実体ではない」として批判されているのは、プラトンの主張するイデアと重ね合せて捉えられた種や類である。では、アリストテレスの言う種や類がどのようにしてイデアと重ね合せて捉えられるのか。このことを見るために、まず、この節ではプラトンのイデア論を概観し、イデア論をアリストテレスはどう捉えているかを見る。次に、次節で、アリストテレスの『範疇論』における二つの述語形を見る。

プラトンの場合、イデアへの言及がなされている多くの箇所において、イデアと対置されているのは、[A]ものとイデアの現われとが一緒になったものである場合と、[B]イデアの現われである場合との二つがある。そして、いずれの場合においても、ものには全く重きが置かれていない。

[A]例えば『国家』476B以下で、美しい声、美しい色、美しい形、およびすべてこの種のものと、美そのものが区別されている。そして、「いろいろの美しい事物は認めるけれども、美それ自体は認めもせず…」と言われ、「ではどうだろう、いまいった人たちは反対に、美そのものが確在することを信じ、それ自体と、それを分けもっているものとをともに観てとる能力をもって、分けもっているものの方を、元のもの自体であると考えたり…」<sup>280</sup>

美しい事物、すなわち、美しいものとかイデアを分けもっているもののように、ものとイデアの現われとが一緒に捉えられたものがイデアに対比されたとき、一緒に捉えられたものは、あり且つあらぬもの、可変的なものとして捉えられる。『国家』479以下で、「多くの美しいもの」のなかに、醜く現われることのないようなものが一つでもあるだろうか、という仕方であ問われ、「美しいものは「醜いもの」に、「醜いもの」は「美しいもの」に、また、「正しいもの」は「不正なもの」に、「不正なもの」は「正しいもの」になりうると答えられている。その意味で、あり且つあらぬというあり方をしてい。『国家』におけるこのような捉え方は、『饗宴』においても見られる。208B以下で、「美しい肉体」「美しい魂」「美しい言論」「美しい動物」等はある面では美しいが、ある面では醜く、あるときには美しいが、あるときには醜い。

上記の例における「 」の中は、ものとイデアの現われとが一緒になったものを現わしている。それに対して、例えば、美のイデアは永遠に存在し、消滅も増減もなく、常に単一の姿を続けている。

[B]ところが、ものとイデアの現われとが一緒になったものは、イデア原因説の観点からする記述では、ものとイデアの現われへと分けて捉えられる。例えば、『ヒippias』(大)286A以下で、美しい仕事、美しい営み、美しい法習が美のイデアと対比されている。そして、「そもそも、正しい人が正しいのは正しさによってではないか」と言われ、「ではまた、知恵ある人たちは知恵によって知恵があるし、すべて善いものは善によって善いのではないか」と言われている。つまり、

$\frac{\text{正しい}}{A'} \frac{\text{人々}}{B}$  は  $\frac{\text{正しさ}}{A}$  によって正しい

$\frac{\text{知恵}}{A'} \text{ある} \frac{\text{人々}}{B}$  は  $\frac{\text{知恵}}{A}$  によって知恵がある

善いものは善によって善い  
 $\frac{A'}{A}$   $\frac{B}{A}$

という仕方であらわれているのであり、Bはものを指し、Aはアイデアを、A'はアイデアの現われを指している。

このように、もの、アイデア、アイデアの現われという三者が区別されているにしても、ものはプラトンの場合、重視されていない。重要なのは、アイデアと、アイデアの現われであって、ものはアイデアの現われが一時的に宿るところのものであるにすぎない。アイデアに対置して捉えられているのはアイデアの現われである。

ものに重きが置かれていないことは、アイデアを、アイデアの現われの原因として強調する次のような表言によく現われている。「美しい人間にしても、それからまた、ししゅう、絵画、彫刻、塑像と、何であれ美しいものはみな…」(『ヒippiアス』大298A以下)。人間、ししゅう、その他は、美の現われが存在することの根拠ではない。したがって、ものは、「その他何であれ～のものはべて」という仕方であらってプラトンによって言及されている。「その他何であれ大きいものはすべて」、「その他何であれ美しいものはすべて」、「その他何であれ等しいものはすべて」という言い方である。

もの、アイデア、アイデアの現われという三者を見た場合、プラトンがものに重きを置いていない理由は、(イ)アイデアの現われとアイデアが重要なのであり、アイデアの現われの存在根拠はアイデアの側にあるからである。(ロ)ものとアイデアの現われの間には必然的な関係がないからである。(ハ)ものはアイデアの現われとの関係では、可変的であり、アイデアの現われがそこにあることもあらぬことも可能なものであり、無限定的なものである。

このように、ものはアイデアの現われとの関係で無限定的であり、必然的なものではない、という在り方は、アリストテレス哲学における個別の実体と付帯的属性との関係に似ている。述語づけの形式で言えば、個別の実体を主語とし、実体以外の範疇におけるもの、つまり付帯的属性を述語とする形式である。例えば、個別の実体を「ソクラテス」とし、付帯的属性を「色白」とした場合、「ソクラテスは色白い」としても、ソクラテス(厳密に言うとならソクラテスの肌)は色黒くありうるという点で無限定であり、ソクラテスであるがゆえに色白いわけでもなく、色白があるためには、ソクラテスでなくとも構わないという点で、ソクラテスと色白との関係は必然的ではなく、したがって付帯的關係である。

さて、ものには重きが置かれていない。このことを踏まえて、もの、アイデア、アイデアの現われという三者の関係を表わせば、次のように言い替えられる。

「すべて美しいものは美によって美しい」

↓

「この美しいものは美しい」

「あの美しいものは美しい」etc.

というように、個々の美しいものについて共通的に美しいと言えるのは、美のアイデアによる。しかし、この美しいもの、あの美しいものにおけるものには重きが置かれていないことによって、ものを捨象し、ものに現われている美にのみ着目することによって、

④ { 「この美は美である」  
 「あの美は美である」

というように、この美、あの美、その他について共通的に美と言えるのは、美のアイデアによる。このような手続きは、「すべて正しいものは正しさによって正しい」(『ヒippiアス』大、287C1-2)、「すべて大きいものは大によって大きい」(『パイドン』100E5)その他についても成り立つ。

プラトンにおいて、「この美」や「あの美」、「この正しさ」や「あの正しさ」のごときアイデアの

現われと、アイデアとの関係で成立するこのような事態を、アリストテレスは次のように言い表わしている。「そこで、プラトンはこの種の存在をアイデアと名づけた。しかし、個々の感覚されるものは、アイデアに因んで名づけられており、アイデアに基づいてその名を呼ばれると言った。というのは、アイデアと名を同じくする多くのものは、アイデアに与かることによって存在するからである」(『形而上学』第1巻第6章987<sup>b</sup>7以下)。ここに言われているのは、(イ)アイデアと名前を同じくする多くの感覚されるもの、つまり、アイデアの現われがあること、(ロ)アイデアの現われはアイデアによって存在することである。また、同書第1巻第9章990<sup>b</sup>6-8には、(ハ)アイデアは多くのアイデアの現われの上に立つ一つのものであることが語られている。

プラトンの場合、美、正、大など(アリストテレスの観点からすれば実体範疇以外の範疇におけるもの)において成立する上述の事柄は、人間や馬など(アリストテレスの観点からすれば、実体の範疇におけるもの)においても全く同様に成立する。

- ⑥ { 「この人間は人間である」  
「あの人間は人間である」

というように、「この人間」「あの人間」その他について、共通的に人間と言えるのは、人間のアイデアによる。④、⑥のような表言は、アリストテレス的な述語づけの観点からすると、感覚される個々のものを主語とし、それを包摂する種を述語とする命題として捉えられる。「この美は美である」、「この人間は人間である」において、「この美」や「この人間」は感覚される個々のものであり、「美」や「人間」はそれらの種である。

アリストテレスによれば、プラトンにおける「多くの個々のもの(アイデアの現われ)について共通的に語られるものがある場合、その共通的に語られるものに応じたアイデアがある」という事態は、「個々のものを主語とし、個々のものを包摂する種を述語とする命題によって表わされる」という仕方では捉えられる。プラトンの場合、個々のものに共通する普遍的なものには、それに応じたアイデアがあるが、アリストテレスからすれば、多くの個々のものに共通する普遍的なものは種であり、そしてその種がアイデアと重ね合わせて捉えられている。<sup>27</sup>

また、諸範疇の区別がなかったプラトンの場合、当然のことながら、④と⑥の命題には、範疇による区別はないのであるが、アリストテレスの場合、④のごとき命題は、実体範疇以外の範疇において同一範疇内での主語述語関係であり、⑥のごとき命題は実体範疇において成立する主語述語関係である。

したがって、アリストテレスが「普遍的なものは実体ではない」というとき、プラトンにおいて、アイデアの現われとアイデアとの関係で成立する事態を、個別の実体と、それを包摂する種の関係として捉え、また、命題の形式では、個別の実体を主語、種を普遍的な述語として捉えることに基づいている。そして、「普遍的なものは実体ではない」ということは、種や類は、それらに包摂される個別の実体の原理原因としての実体ではない、ということの意味している。

ところで、プラトンの場合、個々のものに共通する一つのものに依拠してアイデアがあるとされるが、さらに、その一つのことを包摂するより上位のものに依拠して、また別のアイデアがあり、この過程は累進すると考えられている。プラトンがあるアイデア、さらに上位のアイデアを立てていく仕方を、アリストテレスの次の文章が示している。「また、容易であると思われている事柄、すなわち、すべてのものは一つであるということを実証することができない。というのは、共通的なものを抽象し指定する(ἐκθεσις)という方法では、すべてのものは一つであるということにはならないで、たとえ我々が彼らの想定[どの共通的な名辞にもそれに依拠したアイデアがあるという想定]を認めたとしても、或る一それ自体があるとされるだけだからである。しかし、もし、普遍的なものは類で

あること示さないならば、そういうこと [すなわち、或る一それ自体] があることにはならない。しかし、普遍的なものが類であるということは、あるものたちの場合ありえない。<sup>28</sup>

ここで言われていることは、(イ)共通的なものがある場合、それを個々の事例から抽出し措定することによってアイデアの想定がなされていること、(ロ)しかし、もしその共通的なものが、アリストテレスの立場から見て、類 [あるいは種] である場合に一つのアイデアが立てられること、(ハ)一や存在は一切のものに共通普遍的なものであるとしても、アリストテレスの立場からすると類ではないので一切は一つであるということにはならないということである。この(イ)のことは、逆に言えば、プラトンの立場では、一や存在は一切のものについて語られる共通普遍的なものなので、一切のものを包摂する最高位のアイデアとして捉えられていたことを意味している。

アリストテレスがここで述べている抽出し措定する (*ἐκθεσις*) という方法をプラトンの所で探すとすれば、『ソピステス』253D-Eがそれに相当するであろう。そこにおいては、例えば、個々の人間に対して人間のアイデアがあり、その上に、人間や牛や馬を包括するアイデア、例えば陸上歩行動物があり、さらにその上に、動物のアイデアがあるようにして、より上位のアイデアへ累進することが語られている。<sup>29</sup>

## II 『範疇論』における二つの述語形式

第一実体は、基体について語られることもなければ、基体のうちにあることもなくて、まさに基体そのものである。<sup>30</sup> その第一実体について、われわれのこの論考に関わりのある点だけを抽出すれば、次の二つである。[A]第一実体と、第一実体について語られる種や類との関係。[B]第一実体と、第一実体のうちにある実体範疇以外のもの、つまり付帯的属性との関係。

### [A]について

第一実体と種や類との関係は以下のようなものである。第一実体と言われるのは、特定の人間や特定の馬のごとき個別の実体のことであり、第二実体と言われるのは、第一実体がそれに属しているところの種、および種を包摂する類である。<sup>31</sup>

個別の実体と種、類には述語づけの観点からして、次の関係がある。種は個別の実体に述語される。種には類が述語される。したがって、類は個別の実体について述語される。例えば、ソクラテスについて人間が述語され、人間について動物が述語される。したがって、ソクラテスには動物が述語される。<sup>32</sup>

類や種は『範疇論』において普遍的なものと言われていない。しかし、『分析論後書』では、それらは普遍的なものと言われている。<sup>33</sup> 類や種という普遍的なものは、個別の実体を包摂するもの (*τὸ περιέχον*) である。<sup>34</sup> すでに述べたように、個別の実体について種や類、さらに上位の類が述語され、種は個別の実体を、また、類は種を普遍的なものとして包摂するので、この述語づけ、包摂関係は最も包摂的な類にまで累進する。

この述語づけ、包摂関係は、哲学的諸難問を検討している『形而上学』第3巻の第7アポリアにも反映されている。「もし、諸々の類が事物の原理であり、要素であるとする、個別なものに最も近いものとして述語されるもの [すなわち種] がそうなのか、あるいは第一の類 [すなわち最高類] がそうなのか。例えば、個々の人間の原理であり、個々の人間から一層独立的にあるのは動物なのか、それとも人間なのか。」<sup>35</sup>

個別の実体と種や類との関係が問題とされるとき、『範疇論』の場合でも『形而上学』の場合でも全く同様なのであるが、個別の実体における質料の面が全く考慮されていないことに注目すべきである。

## 〔B〕について

第一実体、つまり、個別の実体と付帯的属性との関係は、述語形式では、個別の実体を主語とし、付帯的属性を述語とする形式で表わされる。例えば「この石は熱い」のごとくである。

個別の実体に固有のこととして、同一のものでありながら、反対のものを受け入れることが挙げられている。<sup>216</sup> この場合、個別の実体は付帯的属性との関係で捉えられている。例えば「この石は熱い」としても、別のときには冷たくありうる。この意味で、付帯的属性との関係で、個別の実体は可変的であり、無限定的であり、必然的な関係にはない。個別の実体の側から見て、この石であるがゆえに熱くあるとか冷たくあるわけではない。また、付帯的属性の側から見て、熱があるためには、その宿るべき個別の実体は、この石でなければならないという必然性はない。

ところで、付帯的属性は存在するためには、個別の実体を形成している要素たる質料を前提する。ところが、質料は付帯的属性の側からは、これこれのものでなければならぬという仕方では限定されない。その意味で、付帯的属性の側から見て、個別の実体、あるいは個別の実体の質料的側面は重きを置かれていない。例えば、「ソクラテスは健康である」としても、健康があるためには、その宿るところは、どうしてもソクラテスの肉体でなければならぬということはない。それ故にこそ、まさに付帯的属性なのである。

## Ⅲ プラトンとアリストテレスの共通点

プラトンの場合、(1)アイデアの現われに対して、その原因としてのアイデア、さらにそのアイデアを包摂するものとしての、より上位のアイデアというように、包摂関係は累進する。そして、最高位にあるのは一と存在である。(2)アイデアの現われがそこにおいてあるそれ、つまり、もの（アリストテレスの場合であれば、付帯的属性との関係で見られた個別の実体、あるいはその質料）は何ら重視されていない。アイデアの現われがそこにあることもあらぬことも可能な無限定的なものであり、アイデアの現われとの関係で何ら必然性をもたぬものである。

包摂関係の累進と、ものはアイデアの現われとの関係で無限定的で必然性をもたないがゆえに重きを置かれていないという、この二点は、アリストテレスにも共通する。すなわちアリストテレスの場合も、

(1)個別の実体を主語、個別の実体を包摂する普遍的なものとしての種や類を述語とした場合、この述語づけは、より普遍的な上位の類へと累進する。また、個別の実体と種や類との関係では、個別の実体を構成する質料は何ら問題となっていない。

(2)個別の実体を主語、実体範疇以外の範疇における付帯的属性を述語とする形式において、個別の実体あるいは個別実体の質料的側面は、付帯的属性との関係で無限定、非必然的である。それ故、付帯的属性の側から見て重きを置かれていない。

プラトンとアリストテレスにおけるこれら両共通点のうち、(1)の述語づけと包摂関係の累進は次節Ⅳと密接に関連し、(2)の質料に（すなわち、プラトンの場合であればものに）重きが置かれていないことは、第Ⅵ節の「形相は質料に述語される」と密接に関連する。プラトンの場合、アイデアの現われとの関係で重きを置かれていないもの、アリストテレスの場合、付帯的属性との関係で重きを置かれていない質料は、アリストテレスの自然哲学、形而上学を貫く根本命題である「形相は質料に述語される」という観点のもとに、重要な役割を果たしている。

IV 『形而上学』第7巻第13章で、「普遍的なものは実体ではない」ということが、どのように論じられているか

『形而上学』第7巻においては、『範疇論』で第一実体とされた個別の実体は実体として前提されている。その上で、第13章はじめて個別の実体の実体、つまり、個別の実体を実体であらしめている原理原因としての実体は何かと問われている。第13章では、個別の実体に述語される普遍的なものが個別の実体の原理原因としての実体であるとするならば、どのような困難が生じてくるかを検討している。この検討は、すでに述べたように、直接的には、アリストテレス哲学における種や類と重ね合わせて捉えられた、プラトンのイデア批判である。しかし、間接的には、アリストテレス哲学内において、実体は知られるものという観点から、定義や本質との関係で、普遍的な種や類を原理原因としての実体であるとするならば、そういう仮説に対する批判ともなっている。

なお、「普遍的なものは実体ではない」ことを論じる第7巻第13章では(そして、第16章に到るまで) *εἶδος* という語は専ら種という意味で用いられているが、質料と対である形相の意味では全く用いられていないことに注意すべきである。主だった批判は次の(1)~(4)である。

(1)1038<sup>b</sup>8-15: 「なぜなら、普遍的に語られるものの中のどんなものであれ、実体であることは不可能であると考えられるからだ。というのは、まず、個々のものにとって固有のものが個々のものの実体であって、それは他のものに属しないのに、普遍的なものは共通的なものだからである。というのは、本来、多くのものに属するものが普遍的なものと言われるからである。ではそのようなものはいかなるものの実体なのか。というのは、(a)すべてのものの実体であるか、あるいは、いかなるものの実体でもないということになろうが、しかし、すべてのものの実体であることは不可能だからである。そこで、(b)一つのものの実体であるならば、ほかのものは、その当の一つのものであることになろう。というのは、実体、すなわち本質が一つであるものたちは一つのものであるからだ。」

普遍的に語られるどんなものでも、個別の実体の原理原因としての実体ではないことの根拠として、「個々のものにとって固有のものが個々のものの実体であって、それは他のものに属しないのに、普遍的なものは共通的なものだから」と言われている。この根拠によって、個別の実体について、普遍的に語られる種や類は、個別の実体の原理原因としての実体ではないことが、(a)、(b)のように語られている。

(a)について: ここで普遍的に語られるものとは、どのような関連の下に捉えられているのか。すでに『範疇論』において見たように、第一の実体、すなわち個別の実体について普遍的に語られる種や類、さらに上位の類のことである。

- (イ) { 「この人間(ソクラテス)は人間である」  
      { 「この人間(プラトン)は人間である」
- (ロ) { 「人間は動物である」  
      { 「馬は動物である」
- (ハ) 「この人間(ソクラテス)は動物である」

(イ)において、人間は個々の人間について共通的に語られる。したがって、普遍的なものである。すると、実体は個々のものに固有である筈なのに、人間はソクラテスにもプラトンにも共通であり、そして共通なものが実体であるとすれば、人間はどの個人についても実体であり、したがって固有のものではなくなる。

さらに、『範疇論』における述語づけの規則、すなわち、個別の実体について種が述語され、(ロ)のごとく、種について類が述語されるならば、(ハ)のごとく、個別の実体について類が述語され、この過程は最高度に普遍的なものにまで累進する。その場合、もし最も普遍的なものが何か一つある

とすれば、それはすべてのものについて述語されるから、すべてのものの実体であることになる。例えば、一が類であるとするならば、一はすべてのものについて述語される普遍的なものである、すべてのものの実体であることになる。すると、すべてのものは当の一であることになる。というのは、それらの本質、すなわち実体が一つであるところのものたちは同一のものである。しかし、これはばかげている。個々のものに固有のものが個々のものの実体だからである。

もちろん、アリストテレスの場合、存在や一は特定の範疇に入る類ではないけれども、プラトンの場合であれば、共通に述語されるゆえ、普遍的なものである。第7巻第13章では存在や一について触れられていないが、アリストテレスの観点からすれば、プラトンの言う存在や一は最も普遍的なアイデアとしてすべてのものに述語された。したがって普遍的なものは実体であるとするかぎり、存在や一はすべてのものの実体であることになる。

(b)について：もし普遍的に語られる人間が、原理原因としての実体であり、個別の実体の本質であるとするならば、例えばソクラテスのうちにプラトンやアリストテレスがあることになり、また、すべての人がソクラテスになってしまう。しかし、こんなことはどうして可能か。種としての人間がソクラテスの原理原因としての実体であるとするならば、同様のことはプラトンにもアリストテレスにも言えるのであって、ソクラテスはプラトンであり、プラトンはアリストテレスであり、すべての人間は同じだということになるからである。しかし、これはばかげている。

さきの(a)の場合には、個別の実体について普遍的に述語されるものが原理原因としての実体であるとした場合、述語されるものの側に視点を捉えて、最も普遍的に述語されるものがあれば、その一つのもものが実体だということになるとされている。しかし、(b)の場合、個別の実体の側に視点を捉えて、個別の実体はみな同じだとされている。

(a)、(b)のいずれも、個別の実体に普遍的なものである種や類が述語される場合、種や類、さらに最も普遍的な一や存在は個別の実体の原理原因としての実体でないことを意味している。そのことの根拠は、普遍的なものは共通のものであるが、個別の実体の原理原因としての実体は個々のものに固有のものだということにある。では、個々のものに固有とはどういうことを意味しているのか。アリストテレス自身その意味をはっきりとは定めていない。したがって、幾つかの解釈が可能である。それは次のものである。

(イ)他のものと一切共通性を見出しえず、当の個別の実体にのみ固有のものという意味。(ロ)個別の実体は時間空間の中に現実的にこのものとして存在しているものである。したがって、数的に異なる個物における質料に働きかけて、このものとして限定し、時空の中に維持存続せしめている原理、すなわち個々のものに内在する形相という意味。すなわち、固有とは、個々のものに内在し働いているという意味。このように解する場合には、種や類、さらに存在や一は包接的普遍であり、論理抽象的であるがゆえに原理原因として働いていないのに、形相は自然的個物に内在し、現に原因として働いているという見解に、アリストテレスは立脚していることになる。

さて、(イ)のように解するならば、例えばソクラテスを他のすべての人々や他の一切のものから区別する固有のものがあり、それがソクラテスの実体であり、他のものについても同様だ、といわれているように見える。<sup>217</sup> こういう解釈を許すかのように、「カリアスはそれ自体カリアスであり、カリアスたるの本質である」<sup>218</sup> とか、「君は君自体であるなにかなのであり、このなにかがまさに君の本質なのである」<sup>219</sup> と言われている。

しかし、固有のものがこのように解された場合、幾つかの問題が生じてくることになる。

㉑『形而上学』のどこにおいても、個別の実体のそれぞれにだけ固有の本質など考察されていない。もし、そのような固有の本質があるなら、なぜアリストテレスは他のすべての人々とは区別されたアリストテレス自身にのみ固有の本質を追求しなかったのか。㉒たとえそのような固有の本質

があるとしても知られえない。というのは、認識は言葉によらねばならず、言葉は普遍的なものだからである。㉔逆に、アリストテレスは、実体は本質であり、認識されるものだとしている。<sup>註20</sup>

固有のもの、ということをも(イ)のように解すると㉔～㉔のごとき困難に出合う。とくに、㉔と㉔とは真向から対立する。Sykesのように<sup>註21</sup>、アリストテレスは矛盾に陥ったままであるとして断念するのならそれまでであるが、固有のものということについての解釈において、(ロ)の道がまだ残されている。これについてはVI(ii)で改めて触れる。

(2)1038<sup>b</sup>16-23: 普遍的なものは、本質 [すなわち形相]<sup>註22</sup> という意味での実体ではないが、本質のうちに現われている要素 [すなわち、本質は定義され、定義は種差プラス類から成るので、定義の要素として類が現われていることを指す] であるがゆえに実体であるという、プラトニストからのあげ足取りの義論に対して、アリストテレスは反論を加える。というのは、その要素たる普遍的なものにも定義があり、その定義には、より上位の普遍的なものが含まれている、という仕方で累進するからである。すなわち、普遍的なものは、本質のうちに現われているがゆえに、実体だとすると、その普遍的なものK<sub>1</sub>についてもまた定義があり、その定義の中に要素として普遍的なものK<sub>2</sub>がある。このようにして、K<sub>1</sub>、K<sub>2</sub>、K<sub>3</sub>…K<sub>n</sub>というようにして、K<sub>n</sub>はそれのうちに包摂されるすべてのものの実体であることになる。しかし、これはすでに、(1)で論駁されたものである。

(3)1038<sup>b</sup>29-30: もし、普遍的に述語されるものが実体だとすれば、「実体であるソクラテスに別の実体が内在していることになり、したがってそれは二つのものの実体であることになろう。」

もし、普遍的なものが実体であれば、人間がソクラテスの実体であるように、同様な仕方で、動物は人間の実体であることになる。アリストテレスの結論は、「したがって、それは二つのものの実体であることになろう」、すなわち、動物は単に人間の実体であるばかりでなく、ソクラテスの実体でもあることになろう。それゆえ、一つの実体が二つのものに属することになる。しかし、一つのは、ただ一つの実体をもつだけである。<sup>註23</sup>

(4)1039<sup>a</sup>3-11: 個別の実体と、それに述語される種、類等の普遍的なものを、可能態と現実態という観点から捉えて、普遍的なものを現実的に存在することから帰結する困難を突いている。アリストテレスの観点からすると、個別の実体は現実態であり、一つのものである。しかし、もし普遍的なものが実体であるとすれば、個別の実体に内在するものとしての普遍的なものが実体であることになり、いくつもの実体が現実的なものとして、一つのものに内在していることになる。しかし、これは不可能である。不可能であることを、アリストテレスは、一本の線分は可能的に二つでありうるが、現実的に二つの線分は現実的に一つの線分たりえない、という例で示している。

以上、第13章の論の主だったものを概観した。普遍的に語られるものは実体ではないというとき、包摂的な種や類は個別の実体の原理原因ではないという意味である。しかし、どうしてアリストテレスはそういうことを言わなければならなかったのか。それは次のことにある。アリストテレスからすれば、プラトニストは一や存在はすべてのものについて普遍的に語られるものとしている。したがって、普遍的なものは、それについて述語されるものの実体であるとすれば、そして、より普遍的なものはより実体であるとすれば、最終的には存在一や一がすべてのものの実体であることになる。そして、実体が同じであるところのものは同じであるとする、すべてのものは一つの同じものだという、おかしなことになる。

ところで、求められているのは、個別の実体の原理原因としての実体である。個別の実体は自然的実体として現実の時空の中にあり、無限定な質料をもっている。しかし、すでに見たように、イデア論において、イデアの現われが宿るところのものが無視されている。そのことは、普遍的なものは実体であるとする立場にも反映されていて、普遍的なものは個別の実体の質料には何ら関わり

をもたない。

プラトンのイデア論は、ものを考慮しない点において、種や類、等の論理的領域における概念をもってするアリストテレスの実体論と共通する点をもつ。このような実体論では、質料を限定し、働いている形相に基づく実体論、不動の動者にまでつながりをもつ実体論には届かないのである。

## V 『形而上学』第7巻第3章における付帯的属性剥奪の意味すること

第7巻第3章は、実体と目される候補を四つあげて、それぞれの候補について検討を始める章である。四つの候補のうちの一つである基体(ὄποκειμενον)について次のように言われている。「基体とは、そのもとに他のものたちが語られるけれども、基体そのものは他のいかなるものについても語られないものである」(1029<sup>a</sup>7以下)。つまり、基体とは、主語となって、述語とならないものである。ところで、基体についてのこの規定は、『範疇論』では第一実体、つまり個別の実体について言われているものである。

アリストテレスは引き続いて、上の引用のように規定しただけでは不十分だとしている(1029<sup>a</sup>9)。その理由を、主語となって述語とならない個別の実体から、性質とか量その他を、つまり、付帯的属性を剥奪していったら、残るのは何とも限定されえない質料であることになり、質料こそ実体だということになるからだとしている。

では、なぜ、主語となって述語とならぬものと規定したのはいけないのか。その理由は、アリストテレスにとって、(a)実体は主語のあり方を規定する述語でなければならぬからであり、(b)質料は単に無限定的なものではなくて、あるものとの関係で本質的なあり方を規定されるべき役割を担うものでなければならないからである。

第3章で、付帯的属性の剥奪によって、無限定的な質料しか残らないという主張は、質料を付帯的属性の側からだけ捉えたらそういうことになるのであって、個別の実体を形成している要素としての形相の側から考えなければならぬことを意味している。

プラトンの場合、事物の質料の側、つまりものの側は不当に卑しめられ、無視されている。また、アリストテレスの場合であっても、個別の実体がそれを包摂する種や類との関係で、また、付帯的属性との関係で見られたならば、個別の実体の質料の側はないがしろにされている。このことは、すでにⅢにおいて見た通りである。

個別の実体を構成している質料は、しかし、形相との関係で見られうる。形相との関係でこそ、質料は卑しめられることなく、本来のあり方、自らの存在根拠をもちうる。それゆえにこそ、質料は、付帯的属性との関係以外の仕方でも捉えられるとして、「実体 [= 形相] は質料に述語される」(1029<sup>a</sup>23-24)ということに言及されているのである。この観点、あるいは述語づけの形式は、アリストテレスの『範疇論』および論理学領域にはなかったものである。この観点あるいは述語づけの形式はアリストテレス哲学の精髓を表わしている。

## VI 「形相は質料に述語される」<sup>註24</sup> ということについて

### (i)

『範疇論』で第一実体とされているものは、個別の実体として、『形而上学』第7巻では前提されている。それを実体たらしめている原理原因としての実体は個別の実体を包摂する種や類ではない。では、原理原因としての実体は何か。アリストテレスは、質料や形相との関連の中で改めて問い直す。

「ソクラテスは人間である」式の命題において、人間は種を指す。しかし、「この肉や骨は人間である」において、人間は形相を示している。同じ  $\epsilon\lambda\delta\omicron\varsigma$  という語で表わされるとしても、種と形相とを区別しなければならない。形相は常に質料との対で捉えられている。

「形相は質料に述語される」という幾分奇妙な表言は『形而上学』において数回見い出される。<sup>225</sup> また、その表言そのものは出てきていないとしても、その表言によって意味されている事柄が述べられている箇所が幾つか見い出される。例えば、『自然学』には次のように言われている。「自然という語は、ちょうど技術という語が技術的な事柄や技術による作品に対して用いられるように、自然にしたがっているものや自然的なものに対して用いられる。ところで、技術の場合、事物について、もしそれが可能的にのみ寐椅子であって、いまだ寐椅子の形相をもたないならば、われわれは、技術的なものだとも、技術による作品だとも言わないだろう。そしてこのことは自然によって存在するものの場合でも同様であろう。可能的に肉あるいは骨であるものは、われわれが肉とは何か、骨とは何かを定義するときに語るところの本質規定を表わす形相を受け取るまでは、いまだ自らの本性をもっていないし、自然によって存在するのでもない。」<sup>226</sup>

ここでは、技術作品と自然によってあるものが、可能的にあるものすなわち質料 [= 素材] と、形相の点から類比的に論じられている。

寐椅子の質料+寐椅子の形相→個々の寐椅子  
 であるように、

肉の質料+肉の形相→個々の肉

骨の質料+骨の形相→個々の骨

ただし、人工物の場合、技術に基づく形相は技術者のうちにあり、作品の素材の外にあるのに対して、自然物の場合には、形相は質料に内在しているという違いがある。「形相は質料に述語される」ということは、形相の内在性、すなわち、ものの本質は働きにあり、質料は本質実現のために、形相によって指定されているということを前提とした捉え方である。

また、「形相は質料に述語される」という考えは、身体と魂との関係について密接な関係をもっている。質料を形相がこれこれと限定して個物たらしめているように、身体を魂が規定して、これこれの動物たらしめているのである。『魂について』で次のように言われている。<sup>227</sup> 「自然的な物体のうち、あるものたちは生命をもっているが、あるものたちはもっていない。…だが、それ [生命に与かっている物体] はこれこれの性質の物体なので、魂は物体ではないことになる。というのは、物体は基体 [= 主語] のもとに語られるものの部類には入らなくて、むしろ基体 [= 主語] すなわち質料としてあるからだ。」この一文には、形相は質料に述語されるという事態が暗に示されている。

『形而上学』第7巻第17章1041<sup>b</sup>4-6では、「煉瓦や石が家である」原因は形相にあるとしている。「」内では煉瓦や石という質料に形相である家が述語されている。同章にはこれと同様な命題は他に幾つかある。「これ、あるいはこれこれをもった身体が人間である」、「質料がなにゆえにあるものであるか」、「これこれの素材がなにゆえに家であるか」。

『形而上学』第7巻第17章では、個別の実体を、形相と質料という両要素から成るものとして捉え、個々のものを当のものとして存在せしめる原因は形相の側にあるとして、形相原因論を展開する。その論の基調は、「煉瓦や石は家である」という考え方である。

アリストテレスの実体論、普遍批判は、以下のことに支えられて成立している。

(1)種と形相とを分けて考えること。

(2)(イ)「ソクラテスは人間である」式の述語づけと、(ロ)「この肉や骨は人間である」式の述語づけを区別すること。

(3)(i)の場合、人間は種であり、プラトンのイデアと重ね合わされている。また主語となるものは個別の実体である。(ii)の場合、人間は形相であり、骨や肉は質料である。形相は質料を組織し、これ(τὸδε τι)として限定し、統一する原理である。

(4)形相と種との関係は、個別の実体に内在している質料を組織している形相の働きによって、個物がある種のものに属する一員となりうる、という関係にある。St.Thomas は、この場合の形相に「種化する原理」として何回も言及している。<sup>228</sup>

プラトンにあっては、「ソクラテスは人間である」、「この美は美である」式の命題にあっては、「この肉や骨は人間である」式の命題はない。

#### (ii)

個々の質料に働く形相という観点からするならば、形相は個別的であると同時に普遍的である。すなわち、個別の実体のある種のものとして限定して時空の中にあらしめるものとしては個別的である。しかし、ある種のものとして捉えられ、認識されるかぎり、他のものと共通である。

形相は普遍的なものである。しかし、常に質料と対になって捉えられるものであり、種的包摂的普遍とは異なる。形相は普遍的なものであるけれども、この特定のものτὸδε τιと言われる。したがって、アリストテレスにおいて、τὸδε τιには二つの意味がある。

(a)種や類との関係では個別の実体がτὸδε τι

(b)無限定的な資料との関係では、形相がτὸδε τι<sup>229</sup>

形相によってはじめて、ものはτὸδε τιと言われる。種によってはそう言われない。種は質料に働きかけないからである。

では、個別の実体のうちに、質料を限定するという仕方存在している形相は生成変化しするのかという問題がある。というのは、個別の実体は生成変化するからである。

生成変化は質料と形相から成る個々の物体についてある。したがって、もし、形相について生成変化があるとすれば、当の形相そのものはまた、それ自体、別の形相と別の質料から成るのでなければならない。さらにその別の形相が生成変化するとすれば、その形相はさらに別の形相と別の質料から成るのでなければならない。このようにして過程は無限遡行する。しかし、無限遡行は不可能だとすれば、個別の実体を形成している形相はそれ自体として生成変化しないのでなければならない。したがって不変恒常的である。<sup>230</sup>

形相は質料に述語される。このことは、形相は個別の実体から離れてありえないことを意味している。そういう形相をわれわれは、思考で抽象する。不変恒常的であるがゆえに、形相については抽象によって認識が成立する。

### VII 形相の内在性について

アリストテレスの論理学領域において、述語づけの形式は四つである。主語述語関係において、述語は主語となっているものの(a)定義(b)特有性(c)類(d)付帯的属性のうちのいずれかを表す。<sup>231</sup> それに対して「形相は質料に述語される」という形式は、アリストテレスの自然学に由来し、『形而上学』で明言されている独特な形式である。これは、質料と形相が不可分な関係にあることを表わしているばかりでなく、個別の実体において形相が内在していること、個別の実体の質料はその在り方を形相の働きや目的によって定められることを意味している。

例えば、人工物であれば、土台、柱、梁等の素材のあり方は、家の形相との関係で規定されてくる。その意味で形相は個別の実体の質料をなす個々の部分に内在している。

自然的に成立しているものの場合も全く同様である。例えば、われわれの身体を構成している質

料や、それから成る構造は、人間固有の働き、例えば知的活動との関係で規定されているのであり、たまたまこうあるといったものではない。このことは人間の身体全体についても、部分についても同様である。目の質料は目の働きに合わせたあり方をしている。

質料のあり方は形相によって規定されているという考え方は、アリストテレス哲学に顕著な目的論的世界観を表わしており、その例はとくに生物学的著作において多く見いだされる。

## 注 記

- (1) Sykes (R.D.Sykes, 「Form in Aristotle : Universal or Particular?」, in *Philosophy*, vol.50, 1975, pp.311-31) は次のように主張する。

アリストテレスの形而上学的体系において、例えば「この家の形相」のごとき、個別的な実体の形相は普遍的なものか、それとも個別的なものなのか。ここで、普遍的なものとは、この家の形相があ家の形相や他の家の形相と同じである場合を指し、個別的なものとは、この家の形相があ家の形相や他の家の形相と同じでない場合を指す。アリストテレスの著作のうちには、この家の形相のごとき諸形相は、普遍的な形相だとしている所と、個別的な形相だとしている所とがある。それらの箇所を検討してみれば、この家の形相のごとき諸形相は普遍的なものでもあり、個別的なものでもありとされていることがわかる。したがって、アリストテレスの形而上学的な考えには矛盾がある。

では、どうしてアリストテレスはそのような矛盾に陥ったのか。彼は初期思想においては、プラトンのイデア論に対抗して、個物こそ第一の実体であるとした。しかし、後に認識や定義の点でプラトンを継承し、したがって、普遍的なものを実体とする。そして、彼はそのことを率直に認めればよかったのに、そうしないで、普遍的なものは実体ではないと言うから、自らの主張に矛盾を来したのである。

- (2) Woods (M.J.Woods, 「Problems in *Metaphysics Z*, chapter 13」, in *Aristotle, Modern Studies in Philosophy, A Collection of critical essays*, ed. by J.M.E. Moravcsik, London, 1968, pp. 215-38) は、『形而上学』第7巻において、種 (species) すなわち形相は実体として捉えられていると解した上で、Woodsは次のように主張する。例えば、種としての人間は、個々の人間について共通的に語られる。したがって、普遍的なものである。ところで、アリストテレスは、普遍的なものは実体ではないとしている。この矛盾をどう解くか。実は、普遍的なもの ( $\tau\acute{o}$  καθόλου) と普遍的に語られるもの ( $\tau\acute{o}$  καθόλου λεγόμενον) とは区別されなければならない。そこで、アリストテレスの言おうとしていることは、「普遍的なものは実体ではない」ということではなくて、「普遍的に語られるものは実体ではない」ということである。この区別により、類は普遍的に語られるものなので実体ではない。しかし、種は普遍的なものではあるが、普遍的に語られるものではないので実体であり、アリストテレスの主張に矛盾はない。以上がWoodsの主張の骨子である。

しかし、Woodsのこの主張に対してはSykes (cf.注(1)であげた論文) その他の人々も主張するように、次のように言える。すなわち、アリストテレスは、『形而上学』第7巻第13章でそんな区別をはっきりしていないし、他の所で区別している証拠もないばかりか、普遍的なものと普遍的に語られるものとを換置しうる仕方を用いている。例えば、1038<sup>b</sup>8-11における καθόλου, καθόλου λεγόμενα, λέγεται καθόλου の用法を見たらよい。また、Woodsは種 (species) と形相とを何ら区別せず、同じものと見做して、しかも species と言ってみたり、form, form of species, species form, species-form, εἶδος などと言ったりして、表言が定まらない。また、第7巻第13章には、常に質料との対で捉えられる形相という意味での εἶδος は一回も用いられていないのに、そのことについては何らの考慮も払われていない。Woodsにとっては、形相と種との区別はなかったからである。

Teloh (Henry Teloh, 「Aristotle's *Metaphysics Z*.13」, in *Canadian Journal of Philosophy*, IX, No.1, 1979, pp.77-89) は次のように言う。第7巻第13章はプラトニストたちの普遍的なものであり数的に一であるイデアに向けられた批判である。したがって、アリストテレスの言う普遍的なものはその批判の対象になっていない。

アリストテレスの言う普遍的なものは、個別の実体において具体化されている。したがって、数的に別個な固有の種形相 (particular species forms) や類形相 (particular generic forms) があり、

それらは個物と共にあり、また、ないというあり方をする。しかし、それらは形相において一つなので、普遍的なものは実体であるということと整合的である。したがって、 $\alpha \sim \gamma$ の相互間で生じる矛盾は、アリストテレスの言う普遍的なものにとっては見かけ上のものにすぎない。

- (3) Lewis (Frank A. Lewis, 「Form and Predication in Aristotle's *Metaphysics*」, in *How Things are*, studies in predication and the history of philosophy and science, ed. by James Bogen and James E. McGuire, 1985, pp.59-83) の見解は次のようである。

『形而上学』第7巻第13章でアリストテレスは次の主張をしているとして、Lewisは上記 $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$ の命題を挙げ、それら相互間で生じる矛盾をいかに解くかを問題にしている。幾つかの検討を通して、 $\alpha$ については $\alpha'$ のように修正されるべきであり、 $\beta$ と $\gamma$ については、それぞれ $\beta'$ と $\gamma'$ のように意味をもつと正確に限定する必要があるとしている。

$\alpha'$  一連の多くのものにとって普遍的であるものは、それらのどれの実体でもない。

$\beta'$  形相は、形相が述語されるところの質料の諸部分との関係で普遍的なものである。

$\gamma'$  形相は、形相が構成要素をなしている個別の実体の実体であり、あるいは形相自らの実体である。

さて、 $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$ 相互の関係では矛盾が生じるが、修正もしくは意味の正確な限定によって $\alpha'$ ,  $\beta'$ ,  $\gamma'$ とすれば相互に矛盾は生じないとLewisは結論する。したがって、Lewisの主張を一つの文章で表わすとすれば、「質料との関係で普遍的なものである形相は、形相が構成要素をなしているところの個別の実体や形相自らの実体であるが、しかし、資料との関係では実体ではない」ということになる。

Lewisのこの説にもいろいろ問題がある。とくに次の2点である。(イ)第7巻第13章では、プラトンのアイデアと重ね合わせて捉えられた種や類は、個別の実体の原理原因としての実体ではないとアリストテレスは主張しているのに、Lewisはそのことに気づいていない。(ロ)Lewisの論文は、「形相は質料に述語される」というアリストテレスの主張を論点の一つとして組み入れている点で評価できるが、種と形相とを分けていない。

なお、Lewisの説は Loux のそれ(注4参照)に近似している。

- (4) まず、Loux (Michael J. Loux, 「Form, Species and Predication in *Metaphysics Z, H and  $\theta$* 」, in *Mind* 88, 1979, pp.1-23) の説は次のようである。

実体を表わす言葉である人間や馬その他は同名異義的な語である。すなわち、(a)普遍的な質料と普遍的な形相から成るものを表わす場合と、(b)普遍的形相のみを表わす場合とがある。(a)の場合は実体的種(substance-species)を表わし、(b)の場合は実体的形相(substance-form)を表わす。種(以下、実体的種を単に種と呼ぶ—筆者)は個別の実体について述語され、これに対して形相(以下、実体的形相を単に形相と呼ぶ—筆者)は個別の実体を形成している質料について述語される。例えば、「フォード氏は人間である」と言った場合、人間は種を表わし、この命題の主語は種の一員たる個人を表わしている。このような述語づけは種による述語づけ、すなわち species-predication (以下、これを個別の実体—種の述語づけと呼ぶ—筆者)である。しかし、「これこれの肉や骨が人間である」と言った場合、人間は形相を表わし、主語は個人を形成している質料を表わしている。このような述語づけは形相による述語づけ、すなわち form-predication (以下、これを質料—形相の述語づけと呼ぶ—筆者)である。

個別の実体—種の述語づけにおいて、我々は個別の実体がいかなる種類のものかということの一種の分類をやっているのであり、質料—形相の述語づけにおいては、質料が何を構成しているかを表わしている。また、前者の述語づけでは、主語と述語の関係は自体的(*καθ' αὐτό*)な関係であるのに、後者の述語づけでは、主語と述語の関係は付带的(*κατὰ συμβεβηκός*)な関係である。

形相はこれ(*τόδε τι*)を指し、現実態であり、本質であるとアリストテレスが言っていることを考慮すれば、質料—形相の述語づけは、個別の実体—種の述語づけより根本的であることがわかる。後者の述語づけが形成するためには、形相が質料を限定することによって種の成員となるところの個別の実体が必要ならぬ。したがって、形相は個別の実体の(原理原因としての)実体である。しかしまた、形相は多くの資料に述語されるゆえに、普遍的なものである。ところで、 $\alpha$ の「普遍的なものは実体ではない」ということの意味は、『形而上学』第7巻第13章では、『命題について』17°38におけるように広義に解さなければならない。したがって、個別の実体—種の述語づけとの関連で言えば、種は個別の実体の実体ではない。また、質料—形相の述語づけとの関係で言えば、形相は個別の実体の構成要素である質料の実体ではない。

したがって、形相は普遍的なものであり、実体であるとしても、 $\alpha$ の「普遍的なものは実体ではない」と、第7巻第13章に言われていることとは矛盾しない。

以上が Loux の見解である。 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ の矛盾を解くのに Loux はまず、普遍的なものとしての種と形相をはっきり分けて捉えている。次に、そのことと関連して、形相を質料との関連で捉え、「形相は質料に述語される」という形而上学的な主張を、矛盾解決のために用いている。この点で、Loux は従来なかった境地にまで踏み込んでいる。(注4に記したように、Lewis も Loux と同様な解決をするのであるが、Loux の論文の方が Lewis のそれより先に成立している。)

しかし、Loux の論考にも幾つかの問題点がある。というのは、「普遍的なものは実体ではない」とアリストテレスが言うとき、その批判はプラトンのイデアに向けられているのに、そのことに気づいていないからである。また、質料-形相の述語づけを、付帯的な述語づけと解していること、つまり、質料と形相との関係を付帯的な関係と解しているのは根本的な誤りである。このことについては後ほど触れる。

次に Driscoll (John A. Driscoll, 「E $\iota$  $\delta$  $\omicron$ s in Aristotle's Earlier and Later Theories of Substance], in *Studies in Aristotle*, ed. by Dominic J. Meara, Catholic University of America Press, 1981, pp.129-159) の説は次のようである。

『形而上学』第7巻において、第一実体とされる形相 (form,  $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$ ) は『範疇論』において第二実体とされた種 (species,  $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$ ) の格上げされたものであると Woods (cf. 注3に記した M.J.Woods の論文) や Owen (G.E.L.Owen, 「The Platonism of Aristotle], in *Proceedings of the British Academy*, 51, 1965, pp.125-150) は主張する。また、SellersやHalter, Hartman は第7巻において第一実体とされている形相は個別の実体に内在する個別の形相であると主張する (Wilfrid Sellers, 「Substance and Form in Aristotle], in *Journal of Philosophy*, 54, 1957, pp.688-99. Edward D. Halter, 「Aristotle on Primary  $\omicron\upsilon\sigma\iota\alpha$ ], in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 57, 1975, pp.1-20. Edwin Haltman, 「Aristotle on the Identity of Substance and Essence], in *Philosophical Review*, 85, 1976, pp.545-61)。

しかし、検討の結果、Driscollはこれらの人々の説をすべて退ける。『形而上学』第7巻における第一実体としての形相 ( $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$ ) は個別の実体の個別の形相でもなければ、『範疇論』における第二実体たる種 (species,  $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$ ) の格上げされたものでもない。

『範疇論』における第二実体としての種は『形而上学』において、普遍的な質料と普遍的な形相の合成体、すなわち合成的普遍者として捉えられている。

ところで、そのような種は個別の実体に述語されるが、形相は質料に述語される。したがって、形相としての  $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$  と種としての  $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$  とを区別しなければならない。形相の出自は自然学的な領域である。Driscoll は形相と種とを区別することによって、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ の相互間で生じる矛盾は解決されるという。というのは、 $\alpha$ における普遍的なものは形相を指すのではなくて、合成的普遍者としての種を指すからである。

Driscoll の主張は以上のようなものである。彼も種は個別の実体に述語されるが、形相は質料に述語されるということとの関連で、種と形相とを分け、そのことに基づいて矛盾を解決している。しかし、第7巻第13章における「普遍的なものは実体ではない」という主張は、プラトンのイデアへ向けての批判であることを見落している。

(5) Leshner (James H. Leshner, 「Aristotle on Form, Substance, and Universals; A Dilemma], in *Phronesis* vol. XVI, No 2, 1971, pp.169-178) は次のようである。

アリストテレスにとって矛盾が生じたのは、いずれも  $\alpha$  の「普遍的なものは実体ではない」、すなわち、「普遍的なものは何ものも実体ではありえない」(Nothing universal can be substance) を意味する次の二つの主張を区別し損ったことによる。

(イ) Nothing which is *non-particular* can exist as substance.

(ロ) Nothing which is *common to many* can exist as substance.

つまり、アリストテレスは(ロ)のように言ったから矛盾が生じたのであって、(イ)のように言えば生じなかったのである。というのは、(イ)のようにすれば、形相は普遍的なものであるけれども、個々のものに内在するから particular であり、矛盾は生じなかったからである。

Leshner の説は以上である。矛盾の解決をこのような言い回しのし損いに求めるのではアリストテレス

哲学の根本の所は何も見えてこないであろう。また、 $\alpha$ の「普遍的なものは実体ではない」と言われるときの普遍的なものとは、プラトンのアイデアと重ねて解された種や類を指していることに Leshar は気づいていない。

- (6) 藤澤令夫訳。ただし、下線は筆者。  
 (7) 『形而上学』第8巻第1章1042<sup>a</sup>5  
 (8) 同書第1巻第9章992<sup>b</sup>9-13  
 (9) 『ソピステス』253D-Eについてはいろいろ解釈が分かれる。しかし、われわれがこの論考においてこれまで跡づけてきたアイデア論によるかぎり、Bluckの解釈が一番すじが通る (*Plato's Sophist, A commentary by Richard Bluck, ed. by Gordon C. Neal, 1975, pp.125-131*)。なお、藤澤令夫もBluck解釈によって訳出し、補注をつけている(プラトン全集3、『ソピステス』pp.253-4, 補注C, 岩波書店, 1976年)  
 (10) 『範疇論』第1章1<sup>b</sup>3-6  
 (11) 同書第5章2<sup>a</sup>11-19  
 (12) 同書同章2<sup>a</sup>20-27  
 (13) 第2巻第19章100<sup>a</sup>16  
 (14) 『形而上学』第5巻第26章1023<sup>b</sup>30  
 (15) 第1章995<sup>b</sup>29-31。また、このアポリアは第3巻第3章998<sup>b</sup>14以下でも敷衍されている。  
 (16) 『範疇論』第5章4<sup>a</sup>10以下  
 (17) Alexandros, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*, ed. M. Hayduck. Berol., 1891, p.523  
 (18) 『形而上学』第5巻第18章1022<sup>a</sup>25-27。なお、カリアスは人名。  
 (19) 同書第7巻第4章1029<sup>b</sup>16  
 (20) 「本質は実体である」(『形而上学』第7巻第6章1031<sup>b</sup>3, 32) 「知識は本質を知ることである」(同章1031<sup>b</sup>6-7) 「個々のものを知ることはその本質を知ること」(同章1031<sup>b</sup>20-21)  
 (21) 注(1)参照  
 (22) 1038<sup>b</sup>3の本質( $\tau\acute{o} \tau\acute{i} \eta\nu \epsilon\lambda\upsilon\alpha\iota$ )をSt.トマスは形相の意味に解する(St. Thomas Aquinas, *Commentary on the Metaphysics of Aristotle*, Tr. by John P. Rowan, Chicago, 1961, p.586.)。そしてThomasが正しい。Bostockはその箇所の本質を種(species)の意味に解している(David Bostock, *Aristotle, Metaphysics, Books Z and H*, Clarendon Press, Oxford, 1994, p.193)。  
 (23) St. Thomas, OP.Cit. p.589  
 (24) 注(4)で記したように、LouxやDriscollは「形相は質料に述語される」ということを、この論考のはじめの所で提出された難問解決のために用いている。しかし、難問との関連を抜きにしてこの命題をとりあげて、その意味を確定しようとした論文に次の三つがある。順次その要旨を記しておく。なお、Brunschwigの論文を除く他の二つは、LouxやDriscollのそれより先に成立したものである。

Richard Blackwell, 「Matter as a subject of predication in Aristotle」, in *Modern Schoolman*, 33, a quarterly Journal of Philosophy, St. Louis Univ. 1955, pp.19-30: アリストテレスにとって述語づけの究極的主語は、『範疇論』における第一実体、つまり、個別の実体である。このことは、アリストテレス哲学を支える根本的な主張の一つである。しかし他方、『形而上学』には質料を述語づけの主語、あるいは究極的主語としている所が六つある。述語づけの主語に関するこれらの見解の間には矛盾はないのか。これに答えるために、Blackwellは質料を述語づけの主語としている所を検討する。

St. Thomasは質料を述語づけの主語とすることに關する議論において、univocal predicationと denominative predicationとを分け、後者を更に、(イ)実体を主語、付帯的属性を述語とする形式と、(ロ)質料を主語、形相[実体]を述語とする形式とに分ける。

BlackwellはThomasのこの分け方のうち、とくに denominative predication (イ)、(ロ)を参考にし、て次の例を提示する。

- |                          |   |   |
|--------------------------|---|---|
| denominative predication | { | (a) 主語を実体、述語を付帯的属性とする命題の例<br>「人は色白い」<br>(b) 主語を実体、述語を質料とする命題の例<br>「箱は木製である」 |
|--------------------------|---|---|

ところが、(a)、(b)の命題の主語を入れ替えて (inverted denominative predication)、

- { (a') 「色白いものが人である」
- { (b') 「木は箱である」

の両者も不自然ではあるが成立する。そして、この (b')こそ形相〔実体〕が質料に述語される形式であるが、元は実体を主語とする形式 (b) に由来している。したがって、個別の実体を究極的主語とみなす、というアリストテレス哲学における根本的な考え方と、質料を主語〔とし、形相を述語〕とする見解には矛盾がないと Blackwell は結論する。

Blackwell の説は以上である。全く表面的な所では彼の説も理解できる。しかし、どうしてアリストテレスは、敢えて質料を主語とし、形相を述語とするような不自然な述語づけの形式へ何回も言及しなければならなかったのか。そのような述語づけを、単に不自然な述語づけとして片づけることはできない。Blackwell は、質料を主語とする述語づけを単に論理的な観点からのみ問題としている。しかし、われわれはこれまでも触れたように、その述語づけの形式には、アリストテレス哲学の精髓が表明されているのである。

Joseph Owens, 「Matter and Predicate in Aristotle」, in *The Concept of Matter in Greek and Medieval Philosophy*, ed. E. McMullin, Notre Dame, Ind., 1963, pp.99-115: 「形相は質料に述語される」という命題の内容を Owens は次のように解している。アリストテレスはこの命題を、「実体は質料に述語される」とも言う (『形而上学』第7巻第3章1029<sup>a</sup>23-24)。そこで Owens は、この命題における実体とは『範疇論』におけるような第一実体、つまり個別の実体と解し、質料は第一質料 (materia prima) を指すと解している。したがって、そのような命題の具体例を挙げるならば、

「第一質料はソクラテスである」

「第一質料はこの馬である」

となる。そして、「形相は質料に述語される」ということを、「実体は質料に述語される」ということの別型だとする。したがって、その場合の形相とは実体的形相を指し、質料は第一質料を指すとする。したがって、具体例を挙げれば、「第一質料は人間だ」とか「第一質料は馬だ」となる。しかし、このような表言は、日常的言語では殆んど意味をもちえない。したがって、これらの命題を可能なかぎり日常的言語で表わすとすれば、

「第一質料は人間化されている」

「第一質料は馬化されている」

というようなことになる。Owens によれば、形相は質料に述語されるとは、このような事態を指している。

以上が Owens の説である。Owens のこの論文は質料に対する形相の述語づけということだけに焦点を絞った論文ではなくて、質料とはいかなるものかという視点のもとで、述語づけを問題としている。しかし、質料に対する形相の述語づけだけに論を絞ると上記の内容である。この説における最大の難点は、「形相は質料に述語される」といわれる場合の質料とは第一質料を指すと決めてかかっていることである。アリストテレスの場合、形相と同様、質料も、高次から見るか低次から見るかに応じて異なる相対的な概念である。したがって、質料は最も根源的な第一質料を指すばかりでなく、形相との合成体である素材 (materia secunda)、例えば木材、青銅、石なども指す。「形相は質料に述語される」ということで、アリストテレスが考えていることは、むしろ materia secunda のことである。

J. Brunschwig, 「La Forme, Prédicat de la Matière?」, en *Études sur la Métaphysique d'Aristote*, publiés par Pierre Aubenque, Paris, 1979, pp.131-159: 「形相は質料に述語される」ということにおいて、「述語される」とはどういう意味かを、Brunschwig は29頁におよぶ論文で詳しく検討している。「述語される」とは、「限定する」を意味する。したがって、形相は質料を限定する、というのがこの命題のもつ意味であると、Brunschwig は結論する。

(25) 第3巻第1章995<sup>b</sup>35, 第4巻999<sup>a</sup>32-34, 第7巻第13章1038<sup>b</sup>6, 第8巻第2章1043<sup>a</sup>5-6, 第9巻第7章1049<sup>a</sup>34-36

(26) 第2巻第1章193<sup>a</sup>31-<sup>b</sup>3

(27) 第2巻第1章412<sup>a</sup>13-22

(28) St. Thomas, OP. Cit. p.183, 408, 501, 574

(29) 形相が τὸδε τι と言われている箇所。『形而上学』第5巻第8章1017<sup>b</sup>25, 第8巻第1章1042<sup>a</sup>29, 第9巻

第7章1049<sup>a</sup>35, 第12巻第3章1070<sup>a</sup>11, 13~15, 『魂について』第2巻第1章412<sup>a</sup>8

(30) 『形而上学』第7巻第8章参照

(31) 『トピカ』第1巻第4章101<sup>b</sup>17-23,

平成9(1997)年9月3日受理

平成9(1997)年12月25日発行

